國學院大學学術情報リポジトリ

『華道学術講座』の開講考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 益井, 邦夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000650

『華道学術講座』の開講考

益井邦夫

はじめに

終戦を迎えて國學院大學が授業を再開したのは二ヵ月後の昭和二十年十月であった。戦場から復員した者、勤労動員の解除に依る生徒や学生の為に一日も早く授業を再開する為に関係者は奔走した。正門を一歩出れば戦災の傷跡が随所に残り、氷川神社の杜も空襲の疫に遭っていたが、幸い大学の校舎は難を免れた。無数に降る焼夷弾の焼け爛れた夥しい破片が校庭にも降り注いだ。学内に留まっていた教職員や学生の方々が懸命に消し回って類焼の難から逃れる事が出来たとは、それに関わった方々から直接伺った懐旧談に詳しく、その言葉の数々が今、走馬灯の様に甦って来る。そうして守られた校舎を整備して、逸早く彼らを迎え入れ、大学は折口信夫（古典文学、民俗学、日本文学演習）、武田祐吉（古典文学、日本文学演習）、西角井正慶（日本文学史）、今泉忠義（国語学）、金田一京助（言語学）、坂本太郎・奥野高廣（日本史学）、石田幹之助（東洋史学）、植木直一郎（法制史）、小林秀雄（西洋史学）、速水敬二（哲学概論）、藤野岩友（漢文学演習）、山本晴雄（教育学）、菊池武一（外国語学）と言った、当時、学界の最高峰に

あった諸氏を講師に、漸く取戻した平和な下での講義を提供したのであった。折口信夫教授が学徒出陣壮行会（昭和十八年十月十四日）の折に寄せた長歌「学問の道」の中で「汝らの千人（チタリ）の一人ひとりだに生きてしあらば、国学はやがて興らむ」と願った事が、二年の苦難の歳月を経てこの時、国学は再び興ろうとしていたのである。

然し大学は、戦後復興に多くの苦難を乗り越えなければならなかった。経営母体であった皇典講究所が解散となって大学を運営する事が出来なくなった。この為、財団法人としての大学にして存立を図る事を企て、昭和二十一年四月十一日に法人登記を完了して新生國學院大學として再出発を図った。その為に処務規程及び職員服務規定の制定等を始め、戦中に政府指令で学生の繰上げや修業年限の短縮、学生定員の減員を行った事の解除に依る復旧手続き、授業・入学試験料や入学金の改定、学則の変更、教授陣の整備、校舎・校地の確保、更に学生の就職等問題が山積し、その処理に忙殺される日々が続いた。八月十日には佐佐木行忠学長に代り石川岩吉氏が学長に就任して、改めて戦後復興の緒に付き、〝告諭〟の〝建学の精神〟に則って、学則の再改正、予科学科課程の改正、新学部の開設、入学科目の変更、学部第二部の開設、女子教養科の開設、神道調査部及び神道研究部の設置、祭祀専修科・祭祀高等科、並びに祭式講習会・神道講習会の発足、後援会の結成等が鋭意進められた。その改革の一環として「華道学術講座」の設置が俎上に載ったのであった。

一、華道学術講座の開設に向けて

まがりなりにも平和を取り戻した事で息を吹き返した伝統芸道である華道も、将来に向けての方策を模索中であった。伝統に胡坐をかいていては発展は望めない。学術的な根拠、裏付けが必要ではと言う考えが識者の間で起こり、

大学も亦、将来に向けて様々な可能性を探っていたさ中であり、両者の思いが一致して、昭和二十五年九月十八日に至って午後五時から在京の華道諸流派の家元等を招き、「華道懇親会」を大講堂地階食堂で開催した。華道関係から草月流創始者の勅使河原蒼風、五百年余の歴史を持つ華道相阿彌流第十八代の横地宗庭、池坊華督の藤原幽竹、古流大観流の大野理瀞、池坊生け花と安達式挿花・古流生け花等を通じて大和花道会を創始した下田天映、文人いけ花と前衛的いけ花を流儀とする清風瓶華の第二代早川尚洞、池坊を学び国風華道瓶花福島流を創始した福島経人、「都新聞」美術記者（学芸部長）の金井紫雲（泰三郎）、龍生派の三代目家元で、日本いけばな芸術協会理事長・いけばな協会理事長を兼ねた吉村華泉、小原流の小原學雲（工藤光岡）、池坊の金子霞璋、生け花研究家で日本大学教授の湯川制（ゆかわさむ）、日新流の新井日新、他に出口忠の諸氏。大学側から石川岩吉学長、松尾三郎主事、宮崎佐止三庶務課長、今泉忠義教授が出席した。

進行役を松尾三郎主事（後、理事長）が務め、先ず石川岩吉学長が挨拶に立ち、國學院大學の設立趣旨や建学の精神を詳しく述べた上で、趣旨の真意に徹底すべき事を力説し、殊に我が国に於いて特有に発達した華道や茶道等と言った物はこれを充分に保護育成する必要が有る旨を述べ、これを犬の例に取り「独特の犬の種を保存する為には、その種を充分研究し保護しなければならない」と言い、華道の将来性を大いに強調されたのである。

松尾三郎主事は講座に於ける教科目に就いて、万葉集・源氏物語・古事記・古今・風俗史・文学概論・芸能史・社会学・華道史・美学・美術史・芸術学・華道学・花道考古学・作家作品鑑賞等具体的な名前を挙げた上で、この講座の名称を「國學院大學華道科」と提案したが、華道側からは、これからの時代、華道に於いても学術的な裏付けとなる講座の開設や教員免許の様な国家的裏付も必要になって来るが、先ずは華道に従事する人々にこの様な教育が必要であるか否かに就いての賛否を伺い、その上で議論を進めてはどうかと言う意見に全員が賛同し、教科に就いては更

に陶芸史、木竹工芸史（鋳金史）、西洋美術史、主として近世現代日本美術史（絵画建築造園）、構成論、色彩論、華道植物学（自然科学的、文芸的）等の名が挙がったが、この議論を通じて大学側は一講座では無く、短期大学の設置を考慮していた節が感ぜられ、これに華道側が現状に鑑みて「講座の開設は国学的芸術の振興を目標とするものであり、（短期大学の場合だと）受講者資格は旧態依然とした現今の状態では学的資格は認められないから難しい。その改善が必要であろう云々」と異を唱えた。家元制度が厳然と存在し継承されている下で華道受講者の年齢幅は際限なく広い。短期大学の設立を認めた場合、年齢制限等、色々な条件が付帯され、更に入学試験の合否結果で新たな問題が生じる。斯界は学術的裏付けを求めているのであって、混乱を求めているのでは無いと言うのである。これに反論の余地は無い。大学側も華道側の意見を尊重して講座の開講に向けての生徒募集問題、華道に詳しい教授陣の確保、一週一回四時間、また十五時間程を一単位、必須講座科目を設ける。更には受講料一か月単位三百円位、入会費は本学学生の場合、百円、諸先生の専門家の講義に就いては華道作家の学問的講義も必要、時間は土曜日曜以外二時間とし午後一時～三時、受講者を百人程度とし月曜日四時間二科目、講堂使用、と具体的な案を提示して意見の交換をした[1]。

この様な概要を経て華道界の意見を集約して「華道学術講座」を開講したのは十一月二十八日で、十二月一日までの四日間、受講時間を午前九時から午後四時まで、受講料を五百円、募集人員を一五〇名とし、受講者には修了証書を授与し、希望者には明年開講予定の「別科華道科」に優先入学の特典を付与する事としたが、「別科華道科」は結局設置されなかった。

講座は大学の南側に隣接する神社庁（現神社本庁）講堂を借用して開催した。受講者募集に際して「開講趣旨」を公表した。

固有の日本美を表象する芸道として今日一般の好尚を博してゐるものに華道があり書道がありまた茶道香道もある。特に華道は現代の複雑な生活様式建築様式に順応し得る性格を十分に具備してゐることを保証せられた今日、その将来性に対してもまた疑ふ余地のないことは、万人の認めるところである。併し、その将来性を如何に進展させ実現させるかは、一に今日の華道教授者の双肩に懸った責任である。創立以来堅実な学風を以て固有日本の神髄を研究し教授し来ったわが國學院大學は、ここに見るところあり、将来の華道振興を計り、華道に堅実な理念を賦与する目的を以て今回華道講座を開講するに至った。大方御支援を希望してやまない。(2)

華道側の後援も有って第一回の受講者は一五五名を数え、折口信夫（教授、「日本美」）、金井紫雲（華道評論家、「花道植物」）、樋口清之（教授、「日本美術史〔室町〕」）、今泉忠義（教授、「源氏物語講話」）、武田祐吉（教授、「万葉集植物の歌」）、湯川制（日本大学教授、生け花研究家、「花道芸術論」）、飯塚重威（教授、「花道と社会」）の七氏に加えて、新進画家の岡本太郎氏を特別講師に迎えて「パブロ・ピカソの話」が講じられた。氏は昭和四年から十五年までの間、フランスで過ごし、抽象美術運動やシュルレアリスム運動（パリを中心に詩人アンドレ・ブルトンらによって提唱された文芸・美術思潮）と直接関わり、戦後は国内に在って積極的に絵画や立体作品を精力的に制作した著名な画家であった。この講座には以後、時代を担う優れた芸術家や研究者、技術者も積極的に招聘し、また文部省社会教育局に対しても後援を依頼した。即ち、昭和二十六年四月五日付で提出した「後援名義下附申請書」には、

今般本学に於て別記趣旨により華道学術講座開催いたしたく　就ては斯道御奨励の思召を以って　文部省社会教育局後援名義御下附の程願上げます　記　一、趣　旨　華道家の教育向上のため　一、受講対象　一般華道家
一、募集人員　二五〇名　一、期　間　五月十四日―五月十七日　一、講師及題目　日本の芸道　國學院大學教授　文学博士　折口信夫、万葉集の自然　國學院大學教授　文学博士　武田祐吉、日本の匂　文学博士　山田憲

太郎、華道植物　東京大学教授　理学博士　本田正次、花と祭　國學院大學教授　文学博士　高崎正秀、指導理学　國學院大學講師　青木孝頼、美学　板垣鷹穂、芸術論　文部省事務官　北條明直、文学の話　作家　土屋信子、室内装飾　吉田五丁八、未定　伊東深水、未定　佐藤敬、新らしいグラス　岩田藤七　以上

これに対して文部省社会教育局は四月十四日付で「華道学術講座開催について社会教育局の後援名義使用許可願の件（回答）昭和二十六年四月五日付で願出のあつたこのことは、さしつかえありません。なお次の事項をお守り下さい。一、事業計画に変更を生じた場合は、直ちに届け出ること。二、事業終了後は、直ちに状況を報告すること云々」と回答した。

この後援を受けた第二回は翌二十六年五月十四日から十七日までの四日間の予定で、会場を大学の大講堂に移して開催したが、講師陣は文部省社会教育局に提出した陣容とは若干異なり、折口信夫（「日本の芸道」）、武田祐吉（「万葉集の自然」）、佐竹義輔（東京国立科学博物館学芸部長、「華道と植物」）、大場磐雄（教授、「考古学の話・日本のつぼ」）、高崎正秀（教授「花と祭」）、臼田甚五郎（助教授、「文学の話」）、山田憲太郎（歴史学者・東洋史、「沈香と伽羅」）、板垣鷹穂（美術評論家、早稲田大学教授、「美学（花のこころ）」）、青木孝頼（講師、「指導心理学」）、樋口清之（「日本美術の話」）、湯川制（「華道芸術」）、今井福治郎（歌人、「短歌と鑑賞と作法」）、金原省吾（東洋大学教授、美術史家、アララギ派の歌人、「東洋絵画の話」）の十四氏に委嘱したが、佐竹義輔氏は佐竹氏一門の佐竹南家（秋田県湯沢市）第十九代当主であり、植物分類学を専攻する植物学者で日本高山植物保護協会会長を務めた方であった。

文部省社会教育局には四月十六日付で「後援名義使用の御許可に相成りました本学主催華道学術講座は事業計画通無事終了いたしましたので左記の通り御報告申上げます　記　一、期間　五月十四日より十七日まで（四日間）　二、場所　國學院大學講堂　三、講座数　拾四講座　四、受講人員　三六七名　以上」と報告した。以後、後援依頼申請

書と報告書をその都度提出した。二回を終えて受講者五二二名に及ぶ盛況となり、これを受けて機関誌の発行も計画され、昭和二十六年四月三十日付で『華道學術講座』を創刊した。編者は、「永い年月を経過して参りました日本美を表象する芸道といたしまして、私どもの心深く沈みきつてをりますものに、華道、書道、茶道又は香道がございますが、わけても華道は、わが民族信仰の中に芽生え、育てられて参り、今日のやうな曾てなお華やぐ世界を現出いたしました。これは将来も、進展して行くものと信じます。併し、今日のやうな盛況でありますならば、それを愈々発展させ、持続させますためには、華道の真姿を明確に把握し、それをどのやうに進めて行かなければならないかの問題が、ここに、おのづから提示されて参ります。これはなか〳〵困難なことでありますが、今日の華道教授者も、愛好者も、情熱を注がなければならない一点であらうかと存じます。ここに於きまして、創立以来日本固有の神髄を探究し、教授してまいりました本学は、将来の華道の振興を計り、斯道に堅実な理念を齎したい目的を持ちまして、曩に第一回華道学術講座を開催いたしましたところ、多数の聴講者を得まして、所期以上の成功を収めることが出来ました。これは誠に御同慶に堪へないところでございます。本書は、このやうな真摯な雰囲気の中に、おのづから醸し出されました聴講者の要望によりまして、編纂いたしましたものでございます云々。」と講座開設目的を紹介して「はしがき」とした。編集に関わった人物は詳らかではないが、今泉忠義教授、松尾三郎主事を中心に講座の運営が図られていたから、両者いずれかの方がこの「はしがき」を記述せられたものと考えるが、創刊号には折口信夫教授が「日本美」、今泉忠義教授が「源氏物語講話」、樋口清之教授が「室町時代文化とその美術」、湯川制氏が「華道理論」、金井紫雲氏が「華道植物」、今井福治郎講師が「他派との交流」、武田祐吉教授が「万葉の花」の論考をそれぞれ寄せられた。

二回目の講座が終わって課程修了者を会員とする「國華会」が組織され、会長に石川岩吉学長を推挙、それに伴い

「会則」を次ぎの様に定め、講座の運営の為に「國華會運営委員会」を組織する事になった。

國華會会則

第一条（名称）この会は國華會と称し事務所を國學院大學内に置く。

第二条（組織）この会は國學院大學華道学術講座修了者で組織する。

第三条（目的）この会は華道に関する学術的真理を研究し、会員相互の向上と親睦をはかり、以て斯界の進歩発展に寄与することを目的とする。

第四条（事業）この会は随時左の事業を行う。

1、学者・名士の講演会。2、教育問題に関する研究会・協議会。3、会員の研究発表及び体験談。4、研究調査のための見学並びに旅行。5、会員親睦のためのリクリエーション。6、其の他。

第五条（役員）この会に次の役員を置く。

1、名誉会長　國學院大學学長を推戴する。2、顧問　若干名。3、相談員　若干名　運営委員長の諮問に応ずる。4、運営委員　若干名　会務を執行する。

第六条（役員選出）この会の役員は次の方法により決定する。

1、相談役　運営委員会の推薦とする。2、運営意員　学長の推薦とする。運営委員の互選によって運営委員長を決定する。

第七条（任期）この会の世話役・運営委員の任期は四年とする。但し重任を妨げない。

第八条（会議）この会の会務を行うため次の会議を設ける。

1、総会　会則の改廃および役員の承認を行う。2、運営委員会　運営に関する事項を審議し、会務を執行す

る。

第九条（経費）この会の経費は会費及び其の他の収入による。

第十条（会員・会費）この会の会員及び会費は次の通りとする。

1、普通会員　華道学術講座受講ごとに二百円を負担するものとする。2、維持会員　上級修了者。一期（四年）分四千円を納入するものとする。

第十一条（年度）会計年度は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

第十二条（附則）会則改変は総会を開き会員の三分の二以上の同意を必要とする。

備考　維持会員には、『華道学術講座』その他の出版物を配布し、継続して講座を聴講の場合は普通会費不要。

条文の改正は年に一回の通常総会で行われ、その後、第五条の3に「参与」、新たに「5、委員　若干名　運営委員会を補佐する」、第六条1に「参与・委員」をそれぞれ加え、第七条の「世話役」を削除し「委員」を加え、備考には「維持会員には、会員バッヂ及び会誌として『華道学術講座』を配布し、継続して講座を聴講の場合は普通会費不要」と改めた。

この様に組織された「國華会」は昭和二十六年以降、大学との取決めで五月一日の神殿鎮座祭、十一月四日の創立記念式典、物故者慰霊祭等に献花する事になり、祭式の都度、神殿に向かって左側の境内によしずを回らし、白布を掛けた机上に季節の草花を活けた花瓶が置かれて、参列者の目と心を長年和ませて来たが、昨今は神殿の扉の前、左右に直接置かれる様になって、近くでの観賞が出来なくなった。

序で先の「華道懇親会」で取上げられた受講者資格に就いては毎回「華道学術講座課程修了証」を授与する事にし、また「華道学力証」も受講回数に応じて授与する事を検討、文面に就いては「華道学力証□級を授與する」、序で三

回受講者は〝初級〟、五回受講者は〝中級〟、七回受講者は〝上級〟とし、〝初級〟の受講者は必須講座科目を必ず受講した上で「学力証」を発行し、〝上級〟の「学力証」を受けた者には「國學院認定教授証」を授与した。本講座が終了する迄に授与した人数は五〇六名であった。

更に文部省が昭和四十八年度から中学・高等学校の課外活動の一つである〝華道部〟を正科に編入する事を決めた為、これに関わって来た教職員、又は諸流派の家元から授与された免状を有し、学校から委嘱されて華道師範を務めていた者は新たに「華道科教員適格書」が必要になった。その〝適格書〟を取得する為には必須の講座を有する学校で改めて講義を受けた上で取得しなければならず、その期待に応えられたのは、今でこそ課程履修制度を有する学校が多くなったが、当時は実に少なく、國學院大學の場合、既に文部省社会教育局の後援に依る「華道学術講座」を開講していた実績が有り、即座にこの期待に応える事が出来た。そこで國學院大學は受入れの為の改編を早急に行い、本講座を「二十回受講」した事を条件にして、従来の「上級学力証」を「適格証」に改めて証書を授与する事にした。その証書には「華道教師認定証　華道〇〇流師範　氏名　生年月日　右の者は國學院大學華道学術講座上級の課程を修了したので華道教師適格者として認定します　昭和年月日　國學院大學学長〇〇〇〇」と明記した。請求者は願書の他に家元の推薦が必要であった。請求者は把握しているだけでも二三八名に及んでいる。これに伴い昭和五十二年八月の第五十五回以降、初級・中級の修了証が廃止された。

本講座の受講生は学生の他に華道諸流派関係者が多くを占めていたが、判明している流派は、池坊正流・池坊聖流・池坊岳草会・池坊聖流岳草会・眼光池坊・古流・古流松悦会・古流御家流・古流崇顕流・千家古流・日本古流・宏道流・郁生流・瑞穂流・桂古流・瓔心華道・崇顕流・朝華流・新未生流・梨月未生流・條風竹胴流・静月流・御山流の諸流である。

二、講師と講義内容

戦争が終わって間もない昭和二十年代初め、華道界もまた将来に向かって暗中模索の中に有った。そこに旱天の慈雨ならぬ救いの手を差し延べた國學院大學もまた戦後復興に努めているさ中であった。國學院大學は我が国伝統芸道の中から華道を選び、幸い斯界の協力を得て講座を発足させたが、講師陣容と講座内容を一見して、大学が本講座の開講に並々ならぬ努力をはらっていたか、一学科に匹敵する程の内容の実に濃いものであった事が分かる。その担当講師と講義題目を確認・整理したところ以下の如くであった。

▽**第一回**＝昭和二五年一一月二八日～一二月一日、神社庁講堂（前記の通り）

▽**第二回**＝二六年五月一四日～一七日、大学大講堂（同）

▽**第三回**＝二六年七月二四日～二七日、大講堂、東京国立博物館応挙館、小石川植物園、武田祐吉（教授「万葉の女性」）、柳田國男（教授「華道以前」）、金田一京助（教授「ユーカラの話」）、西角井正慶（教授「花と舞」）、岸本英夫（講師「芸道心と宗教心」）清原道壽（助教授「教育学」＝後、大東文化大学学長、東京工業大学教授）、友田不二男（助教授「青年心理」）、大木惇夫（本名・軍一、詩人「詩を中心として」）、脇本十九郎（号・楽之軒、東京芸術大学教授「講演」）

▽**第四回**＝一一月一五日～一八日、大講堂、金田一京助（「啄木と私」）、今泉忠義（「源氏物語」）、西角井正慶（「雅楽」）、樋口清之（「古代文化の系統と性格」）、金原省吾（新潟大学教授「美の本質」）、福田清人（児童文学作家、文芸評論家「國木田獨歩の文学と宗教」）、青木孝頼（「教育評価」）、関秀光（日本色彩研究所主事「挿花に於ける配色」）、金井紫雲（「陶磁の花器」）、白井晟一（建築家「建築室内装飾」）、河北倫明（美術評論家「東洋美術」）、

森蘊（おさむ）（文部技官「庭園と華道」）、山本豊市（東京芸術大学教授「デッサンと挿花」）、武田祐吉（万葉集）、石田幹之助（教授「支那の花暦」）、桑田忠親（教授「茶道」）、邊見金三郎（華道評論家「水揚法（演習）」）

▽**第五回**＝二七年五月七日～一〇日、大講堂、岩橋小彌太（「中世の芸能」）、今泉忠義（「源氏物語と花」）、高崎正秀（「花と祭」）、大場磐雄（「遺物に表はれた花」）、菊池武一（教授「能と花」）、亀井勝一郎（評論家「私の美術遍歴」）、向井潤吉（画家「面と線」）、長澤菊治（画家「配色と図案及び演習」）、大井ミノブ（日本女子大学助教授「花道史」）、瀬川清子（大妻女子大学教授、民俗学「花と年中行事」）、友田不二男（「実地指導の心理」）、折口信夫（「神の花、仏の花」）、武田祐吉（「万葉集」）、土岐善麿（歌人・国語学者「能楽に於ける花伝書」）、宝生英雄（宝生流一八代宗家「課外鑑賞（仕舞）」外門人七名）

▽**第六回**＝九月二四日～二七日、大講堂、井の頭自然文化園、西角井正慶（「万葉集」）、高崎正秀（「源氏物語」）、藤井貞文（教授「明治維新」）、安津素彦（教授「宗教心の芽生え」）、守随憲治（講師「最近の歌舞伎」）、佐倉鐵太郎（教授「線の性格と構成」）、大井ミノブ（「花道史」）、松田修（国文学者、文芸評論家「花と伝説」）、長澤菊治（「配色と感情」）、嘉悦一郎（井の頭自然文化園園長「花と生活」）、堀江聡男（井の頭自然文化園技術係長「植物の生態から見た生花の配合」）、邊見金三郎（「花の水揚法」）、清原道壽（「職業指導」）

▽**第七回**＝二八年五月二七日～三〇日、大講堂、東京国立博物館（美術の鑑賞）、西角井正慶（「万葉集」）、高崎正秀（「源氏物語」）、今泉忠義（「婦人語の話」）、桑田忠親（「茶道」）、千宗興若（裏千家家元宗匠「茶道〔献茶〕」）、野間清六（講師「美術に表はれた草花」）、大井ミノブ（「花道史」）、山本雅彦（彫刻家「造形と変形」）、細野尚志（色彩研究所美術主任「色彩の相関性」）、友田不二男（「学ぶ者の心理（心理学）」）、清原道壽（「学習指導（教育学）」）

▽**第八回**＝一一月一八日～二〇日、大講堂、鎌倉八幡宮、近代美術館、臼田甚五郎（「万葉集」）、今泉忠義（「源氏物語」）、座田司（鶴岡八幡宮宮司「鎌倉文化と華道」岡田〔実・権宮司〕氏代講）、中村汀女（俳人「俳句」）、丸茂武重（講師「日本古代の絵画」）、北岡壽逸（教授「時事問題―日本の経済」）、一戸務（中国文学者「中国の花行事」）、邊見金三郎（「陳列・花展の構成法」）、三隅治雄（東京文化財研究所所員「日本芸能の流れ 花の芸能（実演）解説、出演題目＝歌舞伎舞踊 地唄舞 能狂言、近代美術の鑑賞」）

▽**第九回**＝二九年五月一五日～一七日、大講堂、特別鑑賞（八王子車人形）、今井福治郎（講師「万葉集」）、佐藤謙三（教授「源氏物語」）、田邊正男（教授「流行語の分解」）、臼田甚五郎（「物語に表はれた女人像」）、小野祖教（教授「芸道心と宗教心」）、樋口清之（「華道の背景」）、金原省吾（新潟大学教授「花の文化史的意義」）、大井ミノブ（「花道史」）、木俣修（歌人「花と短歌」）、加藤秋邨（俳人「花と俳句」）、今井大彭（画家「線・点・面」）、古仁所智（東横百貨店宣伝部長「陳列と装飾」）

▽**第一〇回**＝一〇月一六日～一八日、大講堂、武田祐吉（「万葉集」）、佐藤謙三（「源氏物語」）、石田幹之助（「長安の牡丹」）、後藤豊治（助教授「人柄とその形成〔教育心理〕」）、古谷綱武（文芸評論家「芸道と女性」）、関秀光（「挿花に於ける配色」）、多田侑史（演劇評論家「花の芸能」〔花の三題〕）、長瀧澄（染色家「植物と染色」）、野村萬作（狂言方和泉流能楽師〈地唄〉「冨貴組」他）、野村萬之丞（同能楽師〈狂言〉「お茶の水」、〈琉球舞踊〉「四ツ竹踊」他）、堀江聡男（井の頭自然文化園技術班長「植物の生態」）、松田修（植物友の会理事「郷土の花」）

▽**第一一回**＝三〇年五月一四日～一六日、大講堂、高崎正秀（「万葉集」）、今泉忠義（「源氏物語」）、岩橋小彌太（「古文書の話」）、大場磐雄（「古代の土器」）、藤野岩友（教授「華栄字譜」）、桑田忠親（「茶道史」）、金原省吾（「花の文化史的意義」）、大井ミノブ（「花道史」）、菅原儀衛（厚生技官「造園と植物」）、細野尚心（「配色について」）、

佐藤良邦（日本経済新聞編輯局次長「時局の話」）

▽**第一二回**＝一〇月一五日～一七日、大講堂、国立自然教育園、今井福治郎（「万葉集」）、西角井正慶（「源氏物語」）、桑田忠親（「茶道史」）、樋口清之（「華道の背景」）、金原省吾（「花の文化史的意義」）、岩本徳一（助教授「祭と花」）、丸茂武重（「古代美術の花＝江戸の花」）、友田不二男（「ノイローゼの心理」）、村岡花子（旧姓・安中、飜訳家・児童文学者「この頃の感想」〈中止〉）、中島邑水（前衛書家、書道芸術院総務理事「現代の書道」）、鶴田総一郎（国立自然教育園次長「武蔵野の野草」）

▽**第一三回**＝三一年五月一九日～二一日、大講堂、高崎正秀（「万葉集」）、臼田甚五郎（「源氏物語」）、今泉忠義（「敬語の今昔」）、山田統（すめる）（教授「思想する人々」）、伊東卓治（講師「華道の美学」）、金原省吾（「花の文化史的意義」）、大井ミノブ（「花道史」）、今井福治郎（「短歌と色彩」）、中島邑水（「現代の書道」）、桑田忠親（「茶道史」）、君塚裕彦（市川市文化財委員「古田織部―式正（しきせい）織部流茶道六天目点前実演・解説」）、秋元清橘（織部流一六代家元〈前同〉）

▽**第一四回**＝一〇月二〇日～二二日、大講堂、今井福治郎（「万葉集」）、高崎正秀（「源氏物語」）、岩橋小彌太（「花押の話」）、西角井正慶（「稲の花」）、樋口清之（「日本の陶器」）、安津素彦（教授「宗教と人生」）、桑田忠親（「茶道史―古田織部」）、金原省吾（「花の文化史的意義」）、大井ミノブ（「花道史」）、中島邑水（「現代の書道」）、長澤菊治（「色彩理論とその応用」）

▽**第一五回**＝三二年六月一日～三日、大講堂、西角井正慶（「万葉集」）、今泉忠義（「源氏物語」）、大場磐雄（「花と小唄」）、今井福治郎（「花伝書」）、三隅治雄（講師「芸能の花」）、渡辺清彦（千葉大学教授「春の植物」）、金原省吾（「花の文化史的意義」）、大井ミノブ（「花道史」）、桑田忠親（「茶道史―小堀遠州」）、中島邑水（「現代の

書道」）、奥田直栄（根津美術館学芸員「室町江戸の蒔絵」）

▽**第一六回**＝一〇月二六日～二八日、大講堂、高崎正秀（「万葉集」）、臼田甚五郎（教授「源氏物語」）、山田統（「生活の知恵」）、後藤豊治（教授「欲求の心理」）、今井福治郎（「花伝書」）、石上堅（講師「花の民俗」）、金原省吾（「花の文化史的意義」）、中島邑水（「現代の書道」）、松田修（植物友の会副会長「郷土の花」）、大井ミノブ（「花道史」）、針生健次郎（日本経済新聞論説委員「時局の話」）

▽**第一七回**＝三三年七月五日～七日、大講堂、今井福治郎（「万葉集」）、西角井正慶（「源氏物語」）、樋口清之（「古代の壷」）、池田彌三郎（慶應義塾大學助教授「最近の国内情勢」）、秦野武国（教務課長「古代の月」）、友田不二男（「教育の基本問題―アメリカを旅して」）、藤野岩友（教授「中国の花」）、岩本徳一（教授「神の花」）、金原省吾（「花の文化史的意義」）、松田修（「日本の花暦」）、三隅治雄（「日本芸能の流れ―江戸系舞踊の性格」）、花川滋（俳優、実演）他

▽**第一八回**＝一一月二一日～二三日、大講堂、国分寺市鉄道教習所隣接の森、西角井正慶（「万葉集」）、高崎正秀（「源氏物語」）、大場磐雄（「国分寺の話」）、今泉忠義（「もののあはれとことば」）、今井福治郎（「花伝書」）、野間清六（講師「美術の古典と前衛」）、佐古純一郎（文芸評論家「芸術における伝統と個性」）、松田修（「万葉植物」）、星野亮勝（国分寺町立文化財保存館館長「万葉植物　菟集の話」）、邊見金三郎（生花評論家「花の奥の細道」）、三隅治雄（「日本芸能の流れ―沖縄の女性」）

▽**第一九回**＝三四年七月四日～六日、大講堂、高崎正秀（「万葉集」）、今泉忠義（「源氏物語」）、桑田忠親（「茶道史」）、西角井正慶（「花の民俗」）、臼田甚五郎（「花の唄」）、村田忠三（助教授「芸術と教育」）、西岡弘（助教授「中国の菊と蘭」）、松田修（「古典の花　現代の花」）、中島邑水（「現代の書道」）、横道万里雄（文部技官「能

の美学」)、三隅治雄(「日本芸能の流れ」)、笹澤忠司(「舞踊小道具とその踊　製作過程説明」)、花柳瀧二・花柳みどり(舞踊〔藤娘・傀儡師〕)

▽**第二〇回**＝一一月一四日～一六日、大講堂、高崎正秀(「万葉集」)、今泉忠義(「源氏物語」)、鈴木敬三(講師「平安時代の服装」)、今井福治郎(「花伝書」)、戸田義雄(助教授「宗教経験」)、飯塚信雄(助教授「花と衣装」)、保多孝三(講師「書の美しさ」)、神谷龍男(教授「国際連合と世界平和」)、吉田健一(講師「現代生活に就いて」)、堀江聡男(「趣味の花木」)、三隅治雄(「日本芸能の流れ―映画「日本の祭り」)

▽**第二一回**＝三五年七月九日～一一日、大講堂、高崎正秀(「万葉集」)、臼田甚五郎(「源氏物語」)、桑田忠親(「茶道史」)、樋口清之(「花の文化史」)、今井福治郎(「花伝書」)、宮崎伊佐夫(教授「英文学と花」)、山田統(「中国文学と自然観照」)、神谷龍男(「世界と日本」)、浅野信(講師「わび・さび」)、松田修(「夏花の感触」)、三隅治雄(「日本芸能の流れ―江戸の感覚―解説」)、若柳吉三次同社中(舞踊)

▽**第二二回**＝一一月一二日～一四日、大講堂、西角井正慶(「万葉集」)、高崎正秀(「源氏物語」)、大場磐雄(「上代容器の変遷」)、松田修(「生花としての植物」)、桑田忠親(「茶道史」)、樋口清之(「花の文化史」)、安津素彦(「花道礼讃」)、田邊正男(「正しい言葉と正しい言葉遣」)、小川清太郎(教授「現代の夫婦気質」)、今井福治郎(「花伝書」)、飯塚信雄(助教授「生活の中の芸術」)、浮乗廉(号・水郷、講師「近代から見たかなの構成美」)

▽**第二三回**＝三六年七月一日～三日、大講堂、高崎正秀(「万葉集」)、今泉忠義(「源氏物語―少女」)、大場磐雄(「容器の変遷」)、桑田忠親(「茶道史」)、樋口清之(「花の文化史」)、千勝重次(助教授「近代小説の女性観」)、西岡弘(「中国の花行事」)、今井福治郎(「花伝書」)、堀江聡男(「野草の話」)、松田修(「物語と花」)、花房信四郎(青山学院高等学校教諭「植物と季節感」)、堀江聡男・花房信四郎(植物の実地指導)

▽**第二四回**＝一一月一八日～二〇日、大講堂、西角井正慶（「万葉集―巻第十一」）、高崎正秀（「源氏物語―玉かつら」）、石田幹之助（「中国人に愛された花について」）、大場磐雄（「容器の変遷」）、桑田忠親（「茶道史」）、樋口清之（「花の文化史」）、臼田甚五郎（「文学の季節感」）、飯塚重威（「花と生活」）、太田卓（助教授「学ぶ心理」）、今井福治郎（「古代の植物」）、三隅治雄（「日本芸能の流れ―近代歌舞伎―映画を入れて」）

▽**第二五回**＝三七年七月一四日～一六日、大講堂、高崎正秀（「万葉集」）、今泉忠義（「源氏物語―蛍」）、岩橋小彌太（「古文書の話」）、大場磐雄（「容器の変遷」）、桑田忠親（「茶道史」）、樋口清之（「花の文化史」）、臼田甚五郎（「文学の季節感」）、吉川泰雄（助教授「現代人の言葉」）、後藤豊治（「現代人の心理」）、千勝重次（「現代人の生活と文学」）、渡辺清彦（「夏の植物」）、今井福治郎（「花伝書」）

▽**第二六回**＝一二月一日～三日、大講堂、西角井正慶（「万葉集―正述心緒・寄物陳思」）、高崎正秀（「源氏物語―真木柱」）、大場磐雄（「容器の変遷」）、桑田忠親（「茶道史」）、樋口清之（「花の文化史」）、臼田甚五郎（「文学の季節感」）、山田統（教授「詩経について」）、篠原円次（画家「色彩と配色」）、角倉一（東京薬科大学教授「薬用植物と生花」）、今井福治郎（「古代の植物」）、三隅治雄（「日本芸能の流れ―現代舞踊の創造」）、黛節子舞踊団（「現代舞踊の創造　古典の現代化」）

▽**第二七回**＝三八年七月一三日～一五日、大講堂、高崎正秀（「万葉集―巻第十二（羈旅発思）」）、今泉忠義（「源氏物語―藤裏葉」）、大場磐雄（「容器の変遷」）、桑田忠親（「茶道史」）、樋口清之（「花の文化史」）、岩本徳一（「花の信仰」）、西岡弘（教授「中国に於ける古典の世界」）、飯塚重威（「レジアータイムの考え方」）、千勝重次（教授「近代短歌の自然詠」）、角川源義（俳人、角川書店主「俳句と季題」）、松田修（「日本植物で世界に誇り得るものは何か」）、今井福治郎（「花伝書」）

▽**第二八回**＝一一月三〇日・一二月一日、大講堂、西角井正慶（「万葉集―巻十二」）、高崎正秀（「源氏物語―若菜〔上〕」）、大場磐雄（「容器の変遷」）、桑田忠親（「茶道史」）、樋口清之（「花の文化史」）、臼田甚五郎（「文学の季節感」）、平井直房（助教授「生きる力」）、和田利政（助教授「このごろの言葉」）、今井福治郎（「花伝書」）、三隅治雄（「日本芸能の流れ―歌舞伎以前」）、黛節子舞踊団（実演）、安津素彦（「花心」）

▽**第二九回**＝三九年四月四日～六日、大講堂、西角井正慶（「万葉集―巻第十三〔雑歌・相聞〕」）、臼田甚五郎（「源氏物語―若菜〔上〕」）、大場磐雄（「古美術の鑑賞」）、今泉忠義（「をんな言葉」）、桑田忠親（「茶道史」）、樋口清之（「花の文化史」）、保多孝三（教授「墨蹟」）、戸田義雄（「生と死」）、宮地誠哉（助教授「習熟の心理」）、多田侑史（裏千家東京出張所所長「風流」）、今井福治郎（「花伝書」）

▽**第三〇回**＝七月一一日～一三日、大講堂、高崎正秀（「万葉集」）、臼田甚五郎（「源氏物語―若菜〔上〕」）、御巫清勇（教授「のりとの話」）、鈴木敬三（助教授「風俗絵と花」）、岡野弘彦（助教授「俳諧の花」）、志賀三重（神道研修部講師「花言葉」）、小野和輝（講師「食べ物の今昔」）、沼田真（千葉大学教授・ヒマラヤ植物探検隊長「ヒマラヤの植物」）、浅野三義（都立神代植物園所長「神代植物園の構成」）、鳥羽正雄（東洋大学教授「城と小堀遠州」）、稲垣吉彦（ＮＨＫプロジューサー「構成のよろこび」）、芳武茂介（武蔵野美術大学教授、工芸家「花器と環境」）

▽**第三一回**＝四〇年四月三日～五日、大講堂、西角井正慶（「万葉集」）、高崎正秀（「源氏物語―若菜〔下〕」）、大場磐雄（「古美術の鑑賞」）、桑田忠親（「茶道史」）、樋口清之（「花の文化史」）、山田統（「中国の思想家たち」）、志賀三重（「花言葉」）、遠藤武（文部省資料館「女性と着物」）、佐藤いつ子（観世流師範「能衣装の話」）、三隅治雄（「日本の笑ひ」）、林家正蔵（落語家、のち彦六「落語の話」）、丸山忍（東京放送プロジューサー「民謡の

系譜」）、今井福治郎（「花伝書」）

▽**第三二回**＝七月一〇日～一二日、大講堂、高崎正秀（「万葉集」）、今泉忠義（「源氏物語―若菜〔下〕、橘姫」）、大場磐雄（「古美術の鑑賞―飛鳥時代、白鳳時代」）、桑田忠親（「豊臣秀吉と女性」）、樋口清之（「花の文化史」）、秦野武国（教授「盲点」）、西岡弘（「杜甫の家庭詩」）、岩本徳一（「花と水」）、吉川泰雄（教授「魅力ある言葉」）、戸田義雄（教授「芸道と信仰と」）、権藤円立（音楽家「上代と歌曲」）、今井福治郎（「花伝書」）

▽**第三三回**＝四一年四月二日～四日、大講堂、今泉忠義（「万葉集」）、高崎正秀（「源氏物語―橋姫」）、大場磐雄（「古美術の鑑賞」）、桑田忠親（「豊臣秀吉と茶道」）、樋口清之（「花の文化史」）、臼田甚五郎（「文学の季節感」）、内野吾郎（教授「美と型と道と」）、高見頴治（教授「花とたとえ」）、神谷龍男（「平和共存」）、飯塚重威（「生活と花」）、倉林正次（助教授「まつり」）、丸茂武重（「花の御所」）

▽**第三四回**＝九月二日～四日、大講堂、西角井正慶（「万葉集」）、今泉忠義（「源氏物語―橋姫」）、鏑木政岐（教授「四季の星と月〔気候上と四季と暦の四季、暦の四季、十干十二支〈干支紀年法〉、四季の星座と星、四季に見える明るい星、四季の月〕」）、内野吾郎（「芸道と流派意義―美の本体について」）、滝川政次郎（教授「華道と香道について」）、高橋義孝（講師、九州大学教授「日本の伝統芸術」）、今井福治郎（「花伝書」）、遠藤武（文化女子大学教授「江戸時代の女装とその生活」）、渡辺清彦（和洋女子大学教授「利休七撰花」）、権堂円立（「朗詠について」）、三隅治雄（「日本芸能の流れ―歌舞伎舞踊の技法と表現」）、若柳吉三次 同社中（実演）

▽**第三五回**＝四二年四月一日～三日、大講堂、高崎正秀（「万葉集」）、田邊正男（「源氏物語―総角」）、大場磐雄（「古美術の鑑賞―平安時代前期〔密教の美術〕」）、桑田忠親（「織田信長と茶道」）、樋口清之（「花の文化史」）、臼田甚五郎（「文学の季節感」）、内野吾郎（「女流の芸術」）、飯塚重威（「花と家庭生活」）、川村一男（和洋女子

大学教授「生活の中の衛生」）、大井ミノブ（日本女子大学教授「生花の歴史」）、浅山英一（千葉大学助教授「花のいのちをより長く」）、マミ・川崎（フラワーデザイナー「住いのフラワーデザイン」）

▽**第三六回**＝九月二日～四日、大講堂、西角井正慶（「万葉集」）、今泉忠義（「源氏物語―宿木」）、大場磐雄（「古美術の鑑賞―平安時代後期〔藤原時代〕」）、桑田忠親（「古田織部と茶道」）、小野祖教（「或る日本的美」）、今井福治郎（講師、和洋女子大学教授「花伝書」）、臼田甚五郎（「文学の季節感」）、西岡弘（「杜甫と憶良と」）、三枝充悳（教授「ほとけたち」）、林陸朗（助教授「文化史上の源氏」）、三隅治雄（「いなかの美学―郷土の芸能」）、坪井洋文（講師「植物の禁忌」）

▽**第三七回**＝四三年四月六日～八日、四〇一番教室、高崎正秀（「万葉集」）、今泉忠義（「源氏物語―東屋」）、大場磐雄（「古美術の鑑賞〔鎌倉時代〕」）、桑田忠親（「名物花入の話」）、樋口清之（「花の文化史」）、神谷龍男（「国際連合憲章をめぐって」）、臼田甚五郎（「文学の季節感」）、後藤豊治（「遊びの心」）、石岡久夫（教授「技と心と道〔技の意義と用法、心の意義と用法、有心と無心、道の意義と用法、学芸の道〕」）、紀野一義（宝仙学園短期大学教授「花といのち」）、倉林正次（「花と儀礼文化」）、桜井満（講師「万葉の春」）

▽**第三八回**＝九月六日～八日、四〇一番教室、高崎正秀（「万葉集」）、今泉忠義（「源氏物語―東屋」）、大場磐雄（「古美術の鑑賞〔鎌倉時代〕」）、桑田忠親（「茶道の名言」）、樋口清之（「花の文化史」）、臼田甚五郎（「文学の季節感」）、村田忠三（教授「芸術と教育」）、平井直房（教授「宗教学的に見た神道の特質」）、興津要（講師、早稲田大学教授「日本文学と落語」）、岡野弘彦（「旅の文学」）、桜井満（「花伝書」）、伊吹一（講師「茶・華道の精神美と女性ことば〔敬語の基準〕」）

▽**第三九回**＝四四年四月五日～七日、四〇一番教室、高崎正秀（「万葉集」）、今泉忠義（「源氏物語―浮舟」）、大

場磐雄（「古美術の鑑賞〔室町時代の美術〕」）、岸本誠二郎（教授「インフレーション問題」）、樋口清之（「花の文化史―日本神話の花」〔日本神話の成立、日本神話の内容、日本神話と花の信仰、桜、百合、藤〕）、臼田甚五郎（「文学の季節感」）、向山寛夫（教授「法律の話」）、秋末一郎（助教授「歌の路」）、吉田健一（助教授「ストレスに強くなる」）、荻久保泰幸（助教授「漱石と鷗外」）、桜井満（「花伝書」）、種友明（九州大学講師「文字と日本人」）

▽**第四〇回**＝八月三〇日～九月一日、常磐松二号館大教室、高崎正秀（「万葉集」）、今泉忠義（「源氏物語―浮舟」）、大場磐雄（「古美術の鑑賞〔桃山時代〕」）、桑田忠親（「謙信をめぐる女性―ドラマと史実」）、鏑木政岐（「月・人生・科学〔太陽・地球・月の位置関係、日食・月食の正確な予報、四季の月、月の科学的データ、アポロ計画、月の表面、月の表面温度、月の成因〕」）、谷信一（講師「東洋の美的感覚」）、樋口清之（「花の文化史」）、臼田甚五郎（「文学の季節感」）、松尾清秋（工学院大学教授「芭蕉と茶道」）三隅治雄（「芸能史と華道」）、諸富嘉男（助教授「健康のリズム」）、桜井満（助教授「花伝書」）

▽**第四一回**＝四五年四月四日～六日、大教室、高崎正秀（「万葉集」）、今泉忠義（「源氏物語」）、大場磐雄（「古美術の鑑賞〔江戸時代〕」）、桑田忠親（「茶道の現代化」）、高橋義孝（「日本芸術の特色」）、樋口清之（「花の文化史」）、浅山英一（「花の色と香りの不思議」）、臼田甚五郎（「文学の季節感」）、飯塚重威（「生活と花」）、村田忠三（「芸術と教育」）、マミ・川崎（「これからのフラワーデザイン」）、桜井満（「花伝書」）

▽**第四二回**＝八月二九日～三一日、大教室、高崎正秀（「万葉集」）、今泉忠義（「源氏物語―夕顔」）、大場磐雄（「日本美術の特色―古美術の鑑賞最終回」）、桑田忠親（「利休の書簡について」）、樋口清之（「花の文化史〔床の間の発生と床の間の美＝床の間の発生、床の間の装飾要素、床の間の機能、床の間の花道、佳節の床花古伝、床飾の

口伝」」、田邊正男（「源氏物語の文章」）、安津素彦（「左右について」）、臼田甚五郎（「文学の季節感」）、鈴木敬三（教授「色と文様」）、桜井満（「花伝書」）

▽**第四三回**＝四六年四月三日～五日、大教室、今泉忠義（「源氏物語」）、伊手健一（教授「政治と人間性」）、桑田忠親（「茶道の歴史」）、後藤豊治（「世代の断絶ということ」）、桜井満（「花の古典―仙伝抄」）、鈴木敬三（「平安時代の色彩」）、高崎正秀（「万葉集」）、土岐善麿（武蔵野女子大学教授「〝初心〟について」）、西岡弘（「白楽天の女性詩」）、樋口清之（「花と日本人」）、松田修（「花の文化史」）、丸茂武重（教授「氷河の花、砂漠の花」）

▽**第四四回**＝八月二八日～三〇日、大教室、浅野信（「ことばのはな」）、今泉忠義（「源氏物語」）、臼田甚五郎（「日本文学の季節感」）、河村又介（教授「民主主義と芸術」）、桑田忠親（「茶道の歴史」）、桜井満（「花の古典―花伝書のこころ」）、鈴木敬三（「平安朝の文様」）、高崎正秀（「万葉集」）、伊達巽（明治神宮権宮司「神秘に通う自然の美」）、中島壌治（助教授「花と書」）、樋口清之（「花と花器―花の文化史」）、堀江英子（マミフラワーデザイン講師「なま花と造花のデザイン」）

▽**第四五回**＝四月一日～三日、大教室、秋末一郎（教授「ある歌僧の歌道修業」）、今泉忠義（名誉教授「源氏物語」）、伊藤幹治（助教授「日本人の生活と論理」）、桑田忠親（「茶道の歴史」）、桜井満（「花の古典―鎮花祭」）、鈴木敬三（「〝おどし（威）〟の色」）、高崎正秀（「万葉集」）、西岡弘（「唐詩選」）、樋口清之（「信仰の中の花―花の文化史」）、松田修（「世界の国花と名花」）、マミ・川崎（「日本人とフラワーデザイン」）、村野孝（教授「円切上げ後の市民生活」）

▽**第四六回**＝八月二六日～二八日、大教室、秋末一郎（「新古今集の花」）、今泉忠義（「源氏物語」）、臼田甚五郎（「日本文学の季節感」）、木村真太郎（助教授「書の鑑賞」）、桑田忠親（「茶道の歴史」）、澤登俊雄（教授「法律

と常識」）、鈴木敬三（「装束の色と文様」）、高崎正秀（客員教授「万葉集」）、西岡弘（「唐詩選」）、樋口清之（「信仰の中の花―花の文化史」）、松田修（「上代の女性と花」）、村田忠三（「芸術と教育」）

▽**第四七回**＝四八年三月二一日～四月二日、大教室、四〇七番教室、石田博（教授「唐詩選〔杜甫〕」）、今泉忠義（「源氏物語」）、岡野弘彦（教授「短歌と現代」）、乙益重隆（教授「大宰府の都」）、河上利勝（教授、医師「栄華物語に出てくる美女はどんな病気で亡なったか」）、桑田忠親（「茶道の歴史」）、三枝充悳（「ほとけたち」）、桜井満（「花の古典（花と文雅意識の発生）」）、鈴木敬三（「色と文様」）、高崎正秀（「万葉集」）、塚谷晃弘（教授、作曲家「現代音楽と華道」）、樋口清之（「信仰の中の花―花の文化史」）

▽**第四八回**＝八月二五日～二七日、大教室、四〇七番教室、今泉忠義（「源氏物語」）、上田賢治（教授「日本の神話」）、木村真太郎（「色紙・短冊について―かなを中心として」）、桑田忠親（客員教授「茶道の歴史」）、桜井満（「花の古典」）、島良夫（教授「外国文学と花」）、鈴木敬三（「染革文様」）、林陸朗（教授「平城京〔ならのみやこ〕をめぐって」）、春田宣（教授「平家物語の周辺」）、樋口清之（「花の文化史」）、峯村光郎（教授「働く婦人の生活の仕方とものの考え方」）、和田利政（教授「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」）

▽**第四九回**＝四九年四月五日～七日、大教室、浅野通有（教授「唐詩選」）、今泉忠義（「源氏物語」）、倉林正次（教授「花と儀礼」）、桑田忠親（名誉教授「茶道の歴史」）、小林義雄（教授「最近の物価問題」）、坂本太郎（教授「古代人と花」）、桜井満（「花と民俗学」）、鈴木敬三（「伝統の服装」）、竹内常一（助教授「遊びのなかでの子どもの発達」）、中島壤治（号・司有、助教授、書家「書の鑑賞」）、樋口清之（「花の文化史」）、吉田健一（「すたれゆく心と体」）

▽**第五〇回**＝八月三〇日～九月一日、大教室、今泉忠義（「源氏物語講義」）、大井ミノブ（「華道の歴史〔仙伝抄、

池坊専応口伝、挿花秘伝図式、浮世風呂〕」）、大場磐雄（客員教授「花と小唄」）、桑田忠親（「茶道の歴史」）、桜井満（「花と民俗学」）、鈴木敬三（「平安の女装」）、高崎正秀（「万葉集講義」）、中野孝次（教授「明治の文学」）、樋口清之（「花の文化史」）、藤野岩友（客員教授「魂を招く歌〔古代楚国の招魂歌〕」）、松田修（「花の文学に影響を与えた人びと」）、保多孝三（「漢字書体について」）

▽**第五一回**＝五〇年四月四日～六日、大教室、浅山英一（「家族で楽しむ園芸」）、今泉忠義（「源氏物語講義」）、内野吾郎（「日本人の美意識」）、大井ミノブ（「華道の歴史―花の徳」）、金田弘（教授「昔の言葉と今の言葉」）、桑田忠親（「茶道の歴史」）、桜井満（「万葉集」）、鈴木敬三（「束帯と衣冠」）、竹内常一（「〔修行〕と〔教養〕」）、樋口清之（「花の文化史」）、向山寛夫（「象徴天皇の歴史的考察」）、山崎元一（助教授「南アジアを旅して」）

▽**第五二回**＝八月二九日～三一日、大教室、浅山英一（「楽しい花木の増し方と育て方」）、阿部正路（教授「中世の花〔馬酔木（アセビ）の花、春は藤波、不咲の桔梗〕」）、飯塚重威（「くらしの中の花」）、今泉忠義（「源氏物語講義」）、大井ミノブ（「〔花道の歴史〕―伝書の続出」）、桑田忠親（「茶道の歴史」）、桜井満（「万葉集講義」）、佐野大和（教授「蝶と千鳥」）、新海一（助教授「老媽神像」）、鈴木敬三（「小袖について」）、中野達（教授「中国蓮話」）、樋口清之（「花の文化史」）

▽**第五三回**＝五一年九月三日～五日、常磐松二号館中講堂、浅山英一（「秋を迎える家庭の園芸」）、伊形洋（助教授「英史に現れた花のいろいろ」）、今泉忠義（「源氏物語講義」）、大井ミノブ（「いけばなの歴史―花器のうつりかわり」）、木村暎（教授「人間生活と法律」）、桑田忠親（「茶道の歴史」）、桜井満（教授「万葉集―橘の歌―〔人麻呂と石見〕」）、鈴木敬三（「染革の文様」）、田邊正男（「万葉人の敬語」）、坪井洋文（教授「白の世界」）、中島壌治（「書の心」）、樋口清之（「花の文化史」）

▽**第五四回**＝五二年三月二五日～二七日、中講堂、浅山英一（「春を迎える家庭の園芸」）、大井ミノブ（「いけばなの歴史」）、荻久保泰幸（教授「寅彦と花」）、加藤有次（助教授「視覚と造形」）、金田元彦（教授「源氏物語―紫の上」）、桑田忠親（「茶道の歴史」）、桜井満（「万葉集―桃の歌」）、鈴木敬三（「色と文様」）、土肥義和（講師「敦煌と千仏洞―古文書は語る」）、樋口清之（「花の文化史」）、弘田嘉男（教授「世界の中の日本―日本のくらしと外国のくらし」）、米川良夫（助教授「生活と花―日本と西洋」）

▽**第五五回**＝八月二六日～二八日、中講堂、臼田甚五郎（「枕草子の美」）、木村真太郎（「かなの美」）、桑田忠親（「茶道の歴史」）、後藤豊治（「意識と行動の屈折」）、小林宏（教授「法の美について」）、桜井満（「藤の歌」）、鈴木敬三（「王朝の生活」）、徳江元正（教授「御伽草子・はなものがたり」）、樋口清之（「花の文化史」）、矢野佐（日本植物友の会理事「季節の花材について」）、吉田健一（教授「健康の知恵」）、和田利政（「〝ことば〟の歴史」）

▽**第五六回**＝五三年九月一日～三日、中講堂、臼田甚五郎（「枕草子の美」）、木村真太郎（「かなの美」）、桑田忠親（「茶道の歴史」）、後藤豊治（「意識と行動の屈折」）、小林宏（「法の美について」）、桜井満（「藤の歌」）、鈴木敬三（「王朝の生活」）、徳江元正（「御伽草子・はなものがたり」）、樋口清之（「花の文化史」）、矢野佐（「季節の花材について」）、吉田健一（「健康の知恵」）、和田利政（「〝ことば〟の歴史」）

▽**第五七回**＝五四年八月三一日～九月二日、中講堂、飯倉一郎（教授「常識と家族法」）、石田博（教授「中国の神話にあらわれた植物」）、台俊夫（教授「屈折する十代」）、神川正彦（教授「遊芸と遊戯の思想」）、桑田忠親（「茶道の歴史」）、桜井満（「万葉の花―むらさき」）、鈴木敬三（「柔装束と強装束」）、徳江元正（「風流考」）、中野達（「猿宏道の『瓶史』について」）、野村純一（助教授「花の禁忌」）、樋口清之（名誉教授「華道の心」）、前川文夫（東京大学名誉教授「植物の語源の話」）

▽**第五八回**＝五五年八月三〇・三一日、一〇五番教室、乙益重隆（「日本の壁画古墳」）、桑田忠親（「茶道の歴史」）、酒井一夫（教授「インフレーション」）、桜井満（「万葉の花―モミヂ」）、鈴木敬三（「色彩と文様」）、中島壌治（教授「書の心」）、樋口清之（「茶花道の背景」）、前川文夫（「植物の語源の話」）

▽**第五九回**＝五六年八月二九・三〇日、四〇七番教室、飯泉優（日本植物友の会常務理事「滅びゆく武蔵野の野草」）、桑田忠親（「茶道の歴史」）、小暮英夫（教授「家庭と法律」）、桜井満（「万葉の花―松」）、鈴木敬三（「染革と文様」）、樋口清之（「湿（しめり）の文化」）、吉田健一（「健康の知恵」）、米原正義（教授「茶湯の和様化」）

▽**第六〇回**＝五七年八月二八・二九日、四〇七番教室、相川欣也（教授「メキシコの社会と自然」）、浅野通有（「四季の詩」）、飯泉優（日本植物友の会副会長「杉のなかま」）、岡崎正継（教授「ポルトガルのことども」）、桑田忠親（「日本の芸道」）、桜井満（「万葉の花」）、鈴木敬三（「有職文様の花」）、中野達（「中国における挿花とその書」）

▽**第六一回**＝五八年八月二七・二八日、四〇七番教室、阿部正路（「古代の花」）、飯泉優（「撫子のなかま」）、桑田忠親（「日本の芸道」）、小林茂美（教授「王朝びとの季節感」）、須原和男（教授「英国の花と日本の花」）、土岐昌訓（教授「日本人の自然観」）、村田忠三（「伝承と創造」）、平林勝政（助教授「アメリカ社会をかいま見て」）

▽**第六二回**＝五九年八月二五・二六日、百周年記念館視聴覚教室、阿部正路（「歌物語の花」）、飯泉優（「秋草のいろいろ」）、大崎正治（教授「フィリピンにおける水と文化」）、桑田忠親（「日本の芸道」）、桜井満（「万葉の花」）、徳江元正（「花の燈籠」）、東千尋（教授「エーゲ海の花」）、米原正義（「利休の死」）

▽**第六三回**＝六〇年八月三・四日、視聴覚教室、飯泉優（「ゆりの仲間」）、荻久保泰幸（「小説の中の花」）、上村勝彦（助教授「生活の中の仏教語」）、小林宏（「日本人と伝統文化―法の歴史を通じて」）、桜井満（「万葉の花」）、中島壌治（「名人伝」）、森田康之助（教授「花の精神史」）、米原正義（「戦国文化の一断面」）

▽**第六四回**＝六一年八月二・三日、視聴覚教室、永井一郎（教授「ウエールズ人とアーサー伝説」）、飯泉優（「アジサイの仲間」）、米原正義（「武野紹鷗一の弟子辻玄哉」）、桜井満（「万葉の花―七夕とナデシコ」）、新井章（江戸川女子短期大学教授「アララギの花」）、中島壌治（「中国史の中の花」）、高橋在久（前千葉県立美術館館長「明治洋画史の花―浅井忠の絵画」）、阿部正路（「椿の歩いた道」）

▽**第六五回**＝六二年八月一・二日、視聴覚教室、飯泉優（「スイカズラ科の植物」）、佐藤隆夫（教授「結婚とは何か―結婚小史」）、米原正義（「千利休の生涯」）、桜井満（「万葉の花―萩の歌」）、高橋在久（元千葉県立美術館館長「近代絵画の花」）、中島壌治（「文字のたのしさ」）、新井章（「信濃の花」）、阿部正路（「源氏の花」）

▽**第六六回**＝六三年八月六・七日、視聴覚教室、阿部正路（「物語の花」）、中島壌治（「書の華」）、高橋在久（「セルボーン博物誌の原郷」）、雨宮義直（教授「都市と経済―都市の歴史と現代を考える」）、小川信（教授「室町将軍家と芸道」）、三橋健（助教授「神々の華」）、飯泉優（日本植物友の会会長「キンポウゲの仲間」）、桜井満（「万葉の花」）

▽**第六七回**＝平成元年八月五・六日、視聴覚教室、吉田健一（「食生活のわすれもの」）、飯泉優（「アヤメの仲間」）、小川信（「室町文化と民衆」）、山下重一（教授「沖縄歴史点描」）、中村幸弘（教授「語構成を考える」）、中島壌治（「日本筆跡の華」）、阿部正路（「詞華集の花」）、桜井満（「万葉の花―みちのくの花」）

▽**第六八回**＝二年八月四・五日、視聴覚教室、島良夫（「樹と文学」）、小川信（「世阿弥の「花」―猿楽能の大成」）、池尾愛子（助教授「日本経済と国際化―壁の花から舞台の華へ」）、徳江元正（「能の花―女郎花など」）、小林達雄（教授「生花と縄文のこころ」）、中島壌治（「文字型民族の生活と書」）、飯泉優（「野菊の仲間」）、桜井満（「万葉の花」）

▽**第六九回**＝三年八月三・四日、視聴覚教室、島良夫（「椿の文化」）、飯泉優（「桜の仲間」）、藤原静雄（助教授「二つの都の物語―ボン・ベルリン」）、米原正義（「紹鷗とわび茶の成立」）、新海一（教授「ソウルの秋、いつ舞ふ一景」）、中島壌治（「その文字の美しさを支える植物」）、平井直房（教授「神まつりの方式」）、桜井満（「万葉の花」）

▽**第七〇回**＝四年八月一・二日、視聴覚教室、島良夫（「ススキを考える」）、飯泉優（「ミカンの仲間」）、米原正義（「織田信長と茶の湯」）、中島壌治（「牡丹の小考」）、徳江元正（「花の都―室町小歌の一句」）、土田壽孝（助教授「アソビ心の経済分析」）、荻久保泰幸（「〝紫陽花の母〟という表現」）、桜井満（「万葉の花」）

▽**第七一回**＝五年七月三一日・八月一日、視聴覚教室、島良夫（「外来植物考」）、久具（古城）佳子（助教授「冷戦後の国際政治」）、飯泉優（「ツキミソウの仲間―アカバナ科の花々」）、米原正義（元教授「利休の高弟 山上宗二―その死をめぐって」）、岡田荘司（教授「伊勢の式年遷宮」）、秋葉直樹（教授「蕪村の花」）、中島壌治（「日本の書写用紙に表れる植物模様」）、桜井満（「万葉の花―大伯皇女とアシビ」）

▽**第七二回**＝六年八月六・七日、視聴覚教室、島良夫（「日本の森・ヨーロッパの森―森について考える」）、飯泉優（「クスノキ科の植物―クロモジの仲間を中心として」）、中泉真樹（助教授「〝競争〟って悪いことですか？―英国における医療サービスの場合と日本」）、中島壌治（「書画における空間処理」）、米原正義（名誉教授「山里と天守と―利休の茶」）、後藤千秋（俳人「俳句にみる〝華〟」）、加藤有次（教授「美食の文化史論―創造の悦び」）、桜井満（「花と日本人―いけばなの源流」）

▽**第七三回**＝七年八月五・六日、視聴覚教室、島良夫（「太陽の花の物語」）、飯泉優（「ミズバショウの仲間」）、高橋在久（江戸川女子短期大学教授「洋画史の花―浅井忠の遺業」）、塚田晃信（明海大学教授「説話文学の花」）、

飯倉一郎（「道理と裁判―民事の争いを中心として」）、槙弥生子（歌人「短歌と花」）、中島壌治（「並木の話」）、阿部正路（「椿の歩いた道」）

▽**第七四回**＝八年八月三・四日、視聴覚教室、伊藤欣二（教授「シダと無花果（イチジク）の見える風景―トマス・ハーディの植物界から」）、飯泉優（「白樺の仲間」）、佐藤毅（江戸川女子短期大学助教授「山の花と海の花」）、鈴木諱三（日本大学医学部技術長、歌人「ゼフィルスと花」）、久保田裕子（助教授「二一世紀の有機農業」）、宋再新（四川大学副教授「万葉集の花鳥風月」）、中島壌治（「多胡郡の碑〔高崎市〕を訪ねて」）、阿部正路（「かたくりの花」）

▽**第七五回**＝九年二・三日、視聴覚教室、飯泉優（「キキョウの仲間」）、波戸岡旭（教授「菅原道真と梅花」）、福島直之（教授「花と言葉」）、関野昭一（教授「ハーグ平和宮の綴錦（つづれにしき）」）、北川博邦（教授「盆景〔シナ盆栽〕」）、徳江元正（「『蔵玉抄』の花物語」）、茂木栄（日本文化研究所助教授「花と民俗儀礼」）、中村啓信（教授「海石榴について」）

▽**第七六回**＝一〇年八月一・二日、視聴覚教室、飯泉優（「日本に野生する椿の仲間」）、野村純一（教授「再説〝椿は何故春の木〟か」）、米原正義（「山里極暑の青柴一枝―招鴎の茶」）、伊藤欣二（「マリアン・ノース―花の旅」）、小木曽道夫（助教授「植物の自己組織」）、宮元啓一（教授「インド人と花」）、徳江元正（「花を盗む人」）、中村啓信（教授「記紀の植物―葡萄と桃」）

▽**第七七回**＝一一年七月三一日・八月一日、視聴覚教室、中西正幸（教授「神道と自然」）、倉石忠彦（教授「花の民俗誌」）、秋葉直樹（「芭蕉の花・蕪村の花」）、須藤豊彦（教授「花と田の神」）、斎藤ミチ子（日本文化研究所助教授「花のシンボリズム」）、横山實（教授「浮世絵美人画の中の花」）、伊形洋（教授「シェイクスピアの花」）、阿部正路（「万葉の花―堅香子（カタカゴ）〔カタクリ〕と馬酔木」）

▽**第七八回**＝一二年八月五・六日、視聴覚教室、野村純一（「仙菓としての桃花」）、倉石忠彦（「花の民俗誌―みのひとつだになきぞかなしき」）、須原和男（「俳句に出る花々」）、大崎正治（「東南アジアの水と森から―日本を考える」）、常光徹（国立歴史民俗博物館助教授「植物の俗信」）、沼部春友（教授「まつりと花」）、徳江元正（「花盗人」）、谷川渥（教授「〈山〉の思想史―東西の自然観」）

▽**第七九回**＝一三年八月五日、視聴覚教室、野村純一（「祝儀と祝儀物」）、松尾恒一（助教授「薬師寺〝花会式〟に見る大和古寺の春迎え」）、中村幸弘（「〝の〟という曲者」）、飯泉優（「植物の名の話」）

▽**第八〇回**＝一四年八月四日、視聴覚教室、野村純一（「〝ワタマシの祝い〟考―物語と習俗」）、小川直之（助教授「年中行事と花―盆の花」）、宮家準（教授「森と山―民俗宗教の視点から」）、飯泉優（「ナデシコのなかま」）

東京地区では昭和四十五年十月二十五日、開講二十周年を記念して〝万葉集〟に因む「大和路―明日香を中心に―」の旅行を行い、以後も京都をはじめ、「奥の細道」の旅をして三百年と言う事で〝万葉集〟の北限である出羽三山を巡る一泊旅行を行うなど「日本の心」を求める旅行が続けられた。

東京地区で五十年を閲して来た本講座は第七十九回を迎えた頃にその役目をほゞ終えたとして翌年の第八十回を以って終了する事にし、これまでの華道関係に限定していた受講対象を廃し、誰でもが受講する事が出来る、その前年の平成十三年に始まった「國學院大學伝統文化に学ぶ講座」に引き継がれ、今日に至っている。

三、関西地区でも開講

我が国を代表する伝統芸道である華道を学術的な面から教授する「華道学術講座」が昭和二十五年十一月から東京

で始まり、盛況を極めていると言う風聞が関西にも伝わったのは昭和三十年代に入ってからの事で、関西でも同様の講座開設の声が華道諸流派家元の間から高まった。この期待に応えて「國華會関西本部」を立上げ、事務所を大阪市東区唐物町（現・大阪市中央区）に所在する「大阪花道会館」内に設け、第一回を昭和三十三年七月二十七日、大阪城の濠に面した国民会館住友生命ビル（旧毎日会館、中央区大手前）で開催した。受講生は一四三名を数え、受講者には東京に準拠して毎回「修了証」を、三回受講者には「華道学力証（初級）」、五回受講者には「華道学力証（中級）」、七回受講者には「華道学力証（上級）」（華道学術教授認定証）をそれぞれ授与する事となった。

開講に当り、会長の石川岩吉学長は「今回、関西華道界の諸流が合同して関西國華會を創立せられましたことは日本芸道の神髄に立ち還ることでありまして、その勇気と情熱とに感激いたし、心からお祝ひ申したいと存じます。創立せられました以上は、兎角芸道の世界に往々に見られる派閥の相剋に終ることなく、和を以て貴しとなし、一致協力して華道の為に力を尽していただきたいと思ひます。破壊は易く建設は難い。建設がなくても維持は更に難しい。希はくは創立に労せられた諸君が、永くその熱意を失はず愈々斯道の育成発展に力を注がれんことを念じて祝辞といたします。」と祝辞を述べた。

初回講師には今泉忠義・大場磐雄・高崎正秀（「万葉集解題」）教授、今井福治郎講師（「花伝書―花と云ふ言葉」）が担当し、流派に就いては東京地区に比べて大阪地区の方が多く、確認出来た流派は、崇祖流・八洲流・三先御流・未生流・華道梨月未生流・誠光未生流・光風未生流・未生流吉香院・黄檗未生流・真草流華道苑・未生正流・未生流一宗会・月輪未生流・華道未生流・黄檗未生本流・正光未生流・玄頁未生流・景山未生御流・光風未生流・容真流・池坊聖流・専正池坊・華道池坊正法・池坊龍生派・秀生派池坊・古遠州流・峰山遠州流・華道池坊正法・千草流・法覚院御門流・すそう流・みささぎ流・龍生派・花道みささぎ流・芳山流・天生派・真派青山流・甲州流・真草流華道

苑・甲山流・橘御流・遠山正流・弘真流・虚心流・先春流・南宗流・翠華流・清生流・昭美流・静真流・二葉流・竹山流の諸流であり、講師と講義題目は以下の如くであった。

☆**第一回**＝昭和三三年七月二七日、国民会館

☆**第二回**＝三四年八月二二・二三日、国民会館、高崎正秀（「源氏物語概説―源氏物語を如何に読むか」）、臼田甚五郎（教授「古代の女性、現在の女性」）、今井福治郎（「花伝書―花と云ふ言葉」）、沢瀉久孝（京都大学名誉教授「山上臣憶良 詠秋野花歌二首〔十七首〕」）、森薀（おさむ）（奈良国立文化財研究所建造物研究室長「庭園と茶室」）、長崎盛輝（京都美術大学助教授「色と型の象徴」）

☆**第三回**＝三五年三月一九・二〇日、国民会館、沢瀉久孝（「万葉集 春の歌（十五首）」）、浅野信（教授「はいかいの味 さび（寂）つけあぢ（附味）」）、芝野庄太郎（大阪学芸大学教授「新時代に於ける教育」）、長崎盛輝（「構成の基礎〔点・線・面に就て〕」）

☆**第四回**＝八月二〇・二一日、国民会館、沢瀉久孝（「秋の歌〔十五首〕」）、樋口清之（教授「華道の背景」）、今井福治郎（「花伝書」）、芝野庄太郎（「日本の芸道教育」）、堀内正和（京都美術大学教授「現代の彫刻」）

☆**第五回**＝三六年四月八・九日、城南会館（元警察クラブ）、沢瀉久孝（「万葉集 巻の十 春の歌」）、越水卓（奈良女子大学教授「一般植物について〔野外講座〕」）、望月信成（大阪市立美術館館長「花道と美術」）、芝野庄太郎（「芸道と教育」）、大場磐雄（「上代容器の変遷」）、今井福治郎（「《近代詩歌鑑賞》与謝野晶子（八首）」）

☆**第六回**＝三七年三月二四・二五日、大阪市未生会館、沢瀉久孝（「万葉集 春十 冬雑歌〔十五首〕」）、桑田忠親（教授「茶人の心 茶道史」）、今井福治郎（「《現代詩歌の鑑賞》岡本かの子、《花伝書》」）、芝野庄太郎（「華道教師について」）、望月信成（「美術鑑賞について」）、清川東洋（浪速短期大学教授「色彩について」）

☆**第七回**＝三八年七月二七・二八日、大阪市未生会館、三隅治雄（講師、文部技官「上方の人と芸」）、今井福治郎（「松の話」）、橘覚勝（大阪大学名誉教授「さびの心理」）、清川東洋（「美の表現と空間について」）、杉本藤次郎（浪速短期大学教授「能美」）、今村輝丸（京都美術大学教授「行動美術の境界彫刻のみかた」）、桑原専渓（桑原専渓流家元「立華について」）

☆**第八回**＝一一月九・一〇日、大阪市未生会館、沢瀉久孝（「冬の歌」）、井島勉（京都大学教授「身について」）、藤野岩友（教授「中国の花＝〔詩経〕（中国最古の詩集）北方を主とす、〔楚辞〕（屈原等の作品集）南方のもの」）、今井福治郎（「花の風情」）、芝野庄太郎（芸道と教育」）、井上慶覚（奈良法隆寺教養部長「仏像について」）

☆**第九回**＝三九年三月二八・二九日、大阪市労働会館、沢瀉久孝（「春の歌＝万葉集〝七夕〟」）、井島勉（「美の世界」）、広江美之助（京都大学教授、文部技官「亜米利加のいけばなを見て」）、大場磐雄（「美術の観方」）、今井福治郎（「花のかをり」）、芝野庄太郎（「現在教育の動向」）、峯孝至（浪速短期大学教授「点と線と面」）

☆**第一〇回**＝七月一八・一九日、大阪市未生会館、沢瀉久孝（「夏の歌」）、井島勉（「美の人生」）、広江美之助（「花と人生」）、西岡弘（教授「中国文学における自然観」）、今井福治郎（「『花のふるさと』『花のかをり』」）、芝野庄太郎（「日本芸道と躾教育」）、山田無門（花園大学学長、妙心寺管長「法話」）

☆**第一一回**＝四〇年七月二四・二五日、大阪市未生会館、沢瀉久孝（「秋の花」）、広江美之助（「いけばなに使う植物に就いて」）、橋本凝胤（薬師寺管長「華道を通じて人間形成」）、芝野庄太郎（「国際時代における伝統と想像に就いて」）、淡川康一（立命館大学教授「いけばなに使う植物に就いてとレジャー」）、山田統（教授「仏教と儒教」）、今井福治郎（「古人と近代的感覚」）、峯孝至（「点・線・面」）

☆**第一二回**＝一一月二〇・二一日、電子会館９Ｆホール、沢瀉久孝（「冬の歌」）、淡川康一（「人生の二大矛盾に

対決した仙厓禅師特に生花道に関連して」)、中村幸太郎(大阪女子大学教授「将来の女性のあゆみ方」)、吉川泰雄(教授「魅力のある言葉」)、芝野庄太郎(「自主性に就て」)、峯孝至(「色彩に就て」)、千勝重次(教授「近代小説に描かれた女性」)

☆**第一三回**=四一年七月一六・一七日、東亜高等美容学校、臼田甚五郎(「花の歌」)、倉林正次(助教授「花と祭」)、沢瀉久孝(「夏の歌」)、淡川康一(「人生と芸術」)、中村昌生(京都工芸繊維大学助教授「床・室内装飾」)、峯孝至(「華道における点・線・面」)、広江美之助(「いけばなにあつかう植物の解説」)、村上建司(浪速短期大学助教授「美に就いて」)

☆**第一四回**=四二年七月九日、大阪高津理容美容専門学校、阿部正路(助教授「花を盗む人びと、天上の花・地上の花」)、中村昌生(「住いと茶室」)、芝野庄太郎(「現代の教育の問題に就て」)、沢瀉久孝(「夏の歌」)

☆**第一五回**=四三年七月二一日、大阪高津理容美容専門学校、淡川康一(大阪学院大学教授、茶道裏千家流顧問「精神文化としての芸道」)、芝野庄太郎(「現代日本の教育」)、桜井満(講師「万葉の春・万葉植物」)、和田利政(助教授「源氏物語の敬語と現代の敬語と」)

☆**第一六回**=一二月一日、大阪高津理容美容専門学校、淡川康一(「花道と人生」)、芝野庄太郎(「このような子供は伸る」)、西岡弘(「『春愁嘆老』(第一時限)、『禊ぎの文学』(第二時限)」)、杉本藤次郎(大阪芸術大学教授「樋口一葉の人間形成について」)

☆**第一七回**=四四年六月二九日、大阪高津理容美容専門学校、淡川康一(「仙厓禅画の教える和敬静寂」)、芝野庄太郎(「これからの教育について」)、岡野弘彦(教授「万葉集講義、大伴家持と花」)、峯孝至(大阪芸術大学教授「『アンバランスの芸術』、スライド」)

☆**第一八回**＝一一月二三日、大阪高津理容美容専門学校、芝野庄太郎（「大学紛争と小・中・高校教育について」）、重森三玲（京都林泉会会長、庭園美術研究家「いけ花古典について」）、松本楢重（奈良県庁嘱託「天平人の生活」）、春田宣（助教授「平家物語とみやび・万葉集」）

☆**第一九回**＝四五年一〇年一八日、大阪高津理容美容専門学校、芝野庄太郎（「情報時代と教育」）、峯孝至（「造形について」）、松本楢重（「日本の国宝・重要文化財」）、桜井満（「花伝書、万葉集」）

☆**第二〇回**＝四六年一一月一三・一四日、大阪コロナホテル、淡川康一（「芸道から見た立身出世」）、広江美之助（「ヨーロッパの旅で見た花」）、芝野庄太郎（「学校制度改革の意味」）、田中四郎（京都外国語大学講師「砂漠の国の女性達」）、松本楢重（「花いろいろ」）、前田勇（大阪教育大学教授「大阪弁について」）、田邊正男（教授「源氏物語講義　心の花」）、桜井満（「万葉集講義　松竹梅の民俗」）

☆**第二一回**＝四七年七月二一・二三日、大阪府教育会館、淡川康一（「最近に於けるパリの禅ブーム及日本芸能の実見談」）、広江美之助（「源氏物語と芭蕉俳文の植物」）、芝野庄太郎（「余暇の教養」）、森淳（大阪芸術大学助教授「アフリカの生活」）、岡森博和（大阪芸術大学助教授「幼児の数観念と指導」）、松本楢重（「天平時代の写経」）、吉川泰雄（「ことばと環境『源氏物語』講義」）、桜井満（「七夕花合せの源流『万葉集』講義」）

☆**第二二回**＝四八年一〇月二〇・二一日、大阪電子会館９Ｆホール、淡川康一（「日本藝道に於ける侘の精神」）、上田正昭（京都大学教授「日本古代文化の伝統」）、景山春樹（京都国立博物館学芸課長「生活のうつわ」）、桜井満（「万葉集　菊の節供」）、芝野庄太郎（「性と教育について」）、田邊正男（「源氏物語」）、永島福太郎（関西学院大学教授「源氏物語・歌道・花道」）、乗岡憲正（大谷女子大学教授「花と民俗・文学」）、広江美之助（「芭蕉・奥の細道と植物　ヨーロッパ旅行で見たいけ花植物」）

☆**第二三回**＝五〇年八月二一・三日、大阪芸術センター、淡川康一（「花道とわびの生活」）、上田正昭（「日本文化の起源」）、景山春樹（「日本文化の特質―その植物性文物」）、桜井満（「万葉集講義・花の民俗学―春の七草、秋の七草」）、金田元彦（教授「源氏物語講義　平安時代の女性の服装について」）、永島福太郎（「歌道・華道・茶道」）、乗岡憲正（「花の民俗と源氏物語」）、三原幸久（大阪外国語大学助教授「民族の心をもとめて」）

☆**第二四回**＝五二年七月三〇・三一日、大阪芸術センター、秋末一郎（教授「南河内に眠る二人の歌僧　華道と歌学」）、金田元彦（「源氏物語講義（夕顔）葵の巻」）、桜井満（「万葉集講義　花の民俗学―芸の道」）、井岡峻一（大阪城南女子短期大学講師「風土と文化」）、芝野庄太郎（「お稽古」）、乗岡憲正（「王朝文学における季節感」）、広江美之助（「桜と人生」）

☆**第二五回**＝五三年七月二九・三〇日、大阪芸術センター、井岡峻一（「シルクロードの花」）、広江美之助（元京都大学教授「伝承の華道美」）、永島福太郎（「歌道と芸道」）、乗岡憲正（「源氏物語を中心とした〈月〉の文学と民俗」）、金田元彦（「夕顔の女君　紫の上」）、佐野大和（教授「縄文土器のはなし」）、桜井満（「万葉集講義　花の民俗学」）

☆**第二六回**＝五四年七月二八・二九日、大阪芸術センター、井岡峻一（「アラビアンナイトの花々」）、景山春樹（帝塚山大学教授「日本文化の体質」）、金田元彦（「源氏物語〝夕顔〟講読」）、木村真太郎（助教授「書の美―調和体」）、桜井満（「万葉の花　花の民俗学」）、芝野庄太郎（「ご聡明」）、森郁夫（奈良文化研究所考古室長「古代の土器に記された文字」）

☆**第二七回**＝五五年七月二六・二七日、大阪芸術センター、桜井満（「花の民俗学　万葉の花―ナデシコ」）、木村真太郎（教授「印の歴史と篆刻」）、米原正義（教授「日本文化の一断面　茶湯の背景」）、金田元彦（「若紫巻

講読」）。※昭和五六年度は休講。

☆**第二八回**＝五七年七月三一日・八月一日、大阪芸術センター、木村真太郎（「龍門石窟と造像記、鄭板橋の書画」）、小林茂美（教授「源氏物語の世界―秘事暴露の文学―　小野小町と女房歌」）、桜井満（「万葉の花　花の民俗学」）、米原正義（「利休の死をめぐって、戦国武将の茶湯」）

☆**第二九回**＝五八年七月三〇・三一日、大阪芸術センター、阿部正路（「万葉集の花、源氏物語の花」）、木村真太郎（「蘭亭序について　手紙の歴史」）、野村純一（「花の説話とその担い手」）、米原正義（「山上宗二とその茶書　戦国茶人の逸話」）。※昭和五九年度は休講。

☆**第三〇回**＝六〇年七月二七・二八日、大阪市教職員法円坂会館、桜井満（「いけばなの源流　万葉の花」）、野村純一（「不老長寿と花―常陸坊海尊の話、八百比丘尼の話」）、米原正義（「戦国文化」）、木村真太郎（「文房四宝の歴史」）

☆**第三一回**＝六一年七月二六・二七日、東大阪市立市民会館、桜井満（「いけばなの源流―七夕花合、万葉の花―ツバキ」）、二木謙一（教授「中世の遊びと祭り」）、阿部正路（「複曲の花」）、木村真太郎（「かなの美」）

☆**第三二回**＝六二年七月二五・二六日、大阪ハイテクノロジー専門学校、木村真太郎（「床の掛け物　墨跡について」）、二木謙一（「三十六歌仙絵の女性」）、桜井満（「花の民俗学　万葉の花」）、阿部正路（「古今の花」）

☆**第三三回**＝六三年七月三〇・三一日、大阪スクールオブミュージック専門学校、阿部正路（「八代集の花」）、米原正義（「利休の生涯」）、木村真太郎（「中国古文字について」）、福田晃（立命館大学教授「〝花の下〟の中世文学」）、森郁夫（京都国立博物館考古室長「天平時代の蓮華文様・唐草文様」）、桜井満（「万葉の花　花の民俗学」）

☆**第三四回**＝平成元年七月二九・三〇日、大阪スクールオブミュージック専門学校、桜井満（「万葉の花　花の

民俗学」）、森郁夫（「万葉の人々とその暮しぶり」）、木村真太郎（「墨竹画と題詩」）、加藤有次（教授「創造文化とみせる構造―学ぶ・創る・観せる」）、鎌田良二（甲南女子大学教授「ことばの諸問題」）、二木謙一（「室町・戦国時代人のおしゃれ感覚」）

☆**第三五回**＝二年七月二八・二九日、生国魂神社参集殿、桜井満（「万葉の花・花の民俗学」）、平井良朋（天理大学教授「吉野花筏」）、木村真太郎（「宋・四大家の書」）、野村純一（「伝説の花・歌謡の花」）、森郁夫（「長屋王と平城京」）、米原正義（「利休と戦国武将」）

☆**第三六回**＝三年七月二七・二八日、生国魂神社参集殿、桜井満（「万葉の花・花の民俗学」）、近江昌司（天理大学参考館副館長「紅葉狩り」）、木村真太郎（「趙子昂（ちょうすこう）の書画」）、徳江元正（教授「花を賞（め）でし人」）、福田晃（「軍記物語の〝花〟」）、二木謙一（「戦場の美学」）

☆**第三七回**＝四年七月二五・二六日、生国魂神社参集殿、木村真太郎（「呉中の四才子」）、小林達雄（教授「うつわの源流」）、桜井満（「万葉の花・花の民俗学」）、三橋健（教授「古代日本人の美意識」）、福田晃（「洛北・北野の花と文学」）、松前健（「花の神話と民俗―諸民族のそれと日本と」）

☆**第三八回**＝五年七月二四・二五日、生国魂神社参集殿、桜井満（「万葉の花―楓と桂と―花の民俗学―御遷宮をめぐって」）、野村純一（「〝木魂聟入〟の話」）、米原正義（「利休の師　武野紹鷗―侘び茶の背景」）、加藤有次（「創造文化とみせる構造―学ぶ・創る・観せる博物館学的発想論」）、福田晃（「中世文学の花―西行の〝桜〟をめぐって」）、野本寛一（近畿大学教授「資源保全の民俗思想」）

☆**第三九回**＝六年七月三〇・三一日、生国魂神社参集殿、阿部正路（「〝源氏物語〟の花」）、松前健（「神話と民俗からみた華道」）、村田治男（歌人「花に託すこころ」）、乗岡憲正（大谷女子大学名誉教授「〝枕草子〟の花」）、

真鍋昌弘（奈良教育大学教授「中世歌謡の花」）、島良夫（教授「文学の中の植物―ツバキとカラマツ」）

☆**第四〇回**＝七年七月二九・三〇日、生国魂神社参集殿、二木謙一（「室町時代における武家殿中の茶」）、栢木喜一（近畿迢空会副会長「万葉の花―四季折々を」）、西村尚（京都短期大学教授「近代短歌の花」）、島良夫（「向日葵をめぐって」）、乗岡憲正（「〝枕草子〟の花」）、阿部正路（「古今の雪月花」）

☆**第四一回**＝八年七月二七・二八日、生国魂神社参集殿、阿部正路（「万葉の花」）、乗岡憲正（「〝枕草子〟の花」）、栢木喜一（近畿迢空会会長「源氏物語の花―物語の中の女性と花と」）、森岡一良（生国魂神社宮司「生国魂神社の御由緒について」）、福田晃（「御伽草子の〝花〟」）、橘好碩（教授「花のフラゼオロギィー―ヨーロッパの花の伝説と慣用表現」）

☆**第四二回**＝九年七月二六・二七日、生国魂神社参集殿、阿部正路（「万葉の花」）、中村啓信（教授「記紀の植物」）、栢木喜一（「源氏物語の花」）、鈴鹿千代乃（神戸女子大学助教授「花の民俗学」）、安田純生（大阪樟蔭女子大学教授「歌枕の花」）、片桐洋一（関西大学教授「平安時代の花と歌」）

☆**第四三回**＝一〇年七月二五・二六日、生国魂神社参集殿、阿部正路（「古今和歌集の花」）、伊藤欣二（教授「キュー・ガーデンへの散歩道」）、鈴鹿千代乃（「花の民俗」）、片桐洋一（「平安時代の花と歌」）、栢木喜一（「源氏物語の花」）、安田純生（「歌枕の花」）

☆**第四四回**＝一一年七月二四・二五日、生国魂神社参集殿、中村啓信（「記紀の植物」）、伊藤欣二（「イングランドの失われた庭園」）、熊谷保孝（神戸学院女子短期大学講師「木や草を用いる日本のいけばな」）、鈴鹿千代乃（「万葉集に花開いた二人の女性―鏡王女と額田王」）、上野誠（奈良大学助教授「花と宴と―万葉文化論」）、吉海直人（同志社女子大学教授「百人一首の中の植物」）

☆**第四五回**＝一二年七月二九・三〇日、生国魂神社参集殿、野村純一（「聖なる樹木・聖なる花」）、伊藤欣二（「幻想植物考」）、矢野憲一（神宮徴古館館長「伊勢神宮と花」）、野本寛一（「花と環境民俗学」）、斎藤寿始子（前大阪国際児童文学館総括専門員、業務室長「花と子ども―わらべ唄と詩の心を訪ねて」）、島津忠夫（大阪大学名誉教授「連歌会席の花とその由来―供花・生け花・花賞翫」）

☆**第四六回**＝一三年七月二九日、生国魂神社参集殿、野村純一（「花は椿・杖は藜（あかざ）―比丘尼と海尊を巡って」）、上野誠（「万葉びとの米作り―古代生活のひとこま」）、吉川祐子（中京女子大学講師・民俗文化研究所代表「子どもとハレ着」）

☆**第四七回**＝一四年七月二八日、生国魂神社参集殿、杉山林継（教授「古墳時代の花の冠」）、野村純一（「京・大阪の〝桃太郎〟話」）、嵯峨井建（賀茂御祖神社禰宜「かざしと祭」）、吉川祐子（「カッパと子ども―遠野のカッパ譚をめぐって」）

☆**第四八回**＝一五年七月二七日、生国魂神社参集殿、上野誠（「旅人のホンネ、家持のタテマエ―万葉集のうた」）、野本寛一（「食の民俗思想」）、矢野憲一（五十鈴塾塾長「伊勢神宮の伝統文化」）、杉山林継（「雄略記の考古学」）

関西地区も東京地区に倣い、平成十五年の第四十八回を以って終了し、平成十三年に始まった「國學院大學伝統文化に学ぶ講座」に継承されてその役目を終えた。[3]

おわりに

戦争が終わり、佐佐木行忠理事長・学長のもとで復興への緒に就いた矢先の昭和二十年十二月十五日、連合国軍最

高司令官総司令部（ＧＨＱ）に依り発せられた「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」の覚書、所謂「神道指令」を受けて、翌昭和二十一年一月二十六日、経営母体であった皇典講究所が解散する危難に遭遇し、國學院大學の存立が危ぶまれる事態となった。この為、二月十五日、明治十五年以来培って来た学問と教育を新時代に相応しい大学に再構築する為の大学設立委員会を組織して規則や寄付行為、予算、財産目録、更には理事・監事・評議員・参与の選任等を審議・決議し、理事長に佐佐木行忠氏を新たに選び、組織を財団法人化して再出発する事として三月二十日に認可を得、ここに新生國學院大學を誕生させた。併し一難去って五月七日公布の勅令第二六三号（教職員ノ除去、就職禁止及復職ノ件）に接して佐佐木行忠理事長・学長がその指定を受けて八月十日に辞任する事態となった。公布以来、指定を危ぶんで来た理事会は万一に備えて後任の人選に苦慮しながらも、元理事の石川岩吉氏を適任と認めて交渉し、同日の理事会で補欠理事に選定し、序で理事長に互選、更に二十三日に開催の教授会で学長に推挙された事に依り理事会は就任を承認し、ここに石川岩吉理事長・学長体勢が誕生し、新時代を切開いて行く事となった。

だが再出発した当時の社会は急激なインフレーションに苛まれ、これを抑制する為に政府は昭和二十一年二月十七日に「金融緊急措置法」を公布した。これは従来の日本銀行券の流通を停止し新円への切換えを行った法令であり、同時に「物価統制令」も施行して新物価体系を作り経済の再建を図った為に、國學院大學にとってもこの政策が大きな障害となった。

即ち昭和十二年七月七日に購入した世田谷区深沢運動場（坪数一万四千六百四十二坪一合五勺、現在の深沢三丁目一～二十五番地一帯）を昭和十八年十一月二日、「学生、生徒ヲ運動場ヘ運ブコト困難トナリタルコト、財政上赤字補填ヲ為ス資金ノ必要ヲ生ジタルコト、退職教職員ノ手当支給ノ資金ヲ必要トシタルコト」等を理由に東京都住宅営

団に五十四万千七百五十円で売却、その内二十万円を保管して運動場の替地購入及び大学の運営資金に備えたが、急激なインフレーションの下でその価値を失い、替地の獲得どころか再出発に必要な資金を失って大学経営に頗る甚大な影響を与えた。[4] この為、石川岩吉氏が理事長・学長に就任して第一に着手しなければならなかったのは財政の建て直しが喫緊事であった。石川岩吉理事長・学長は昭和二十二年十月二十三日、茨城県大洗町の大洗磯前神社に於ける一都七県神社総代議員会に出席したのを皮切りに約一年間、全国の神社や同窓会（院友会）を行脚して資金の集積に努めたのである。[5]

その一方で学則の再改正、予科学科課程の改正、入学試験科目の変更、校舎の確保、「神道指令」に対する神道調査部や神道研究部の設置、祭祀専修科や祭祀高等科の発足、神道講習会の再開、更に学部第二部及び女子教養科の開設等に努める過程の中で華道学術講座問題が俎上に載ったのである。

華道界側の意見で学科から講座に変更したと思われる華道学術講座開始直後の講座内容及び講師陣容等は、一つの学科を思わせる内容である。前述した様に講師陣容には学外の研究者や歌人、評論家、芸術家等も招聘する等、誠に多士済済の講師陣であり、残されたレジュメの記述類からは、源氏物語や万葉集にしても、或いは小石川植物園や東京国立博物館、井の頭自然文化園等校外での講座にしても、当時の最高の研究成果を教授していた事が窺われ、戦後復興に取組んだ関係者の努力が脈々と伝わって来る様である。

講座も後半になると、前述したように奈良大和路や京都洛中洛外、更には山形出羽三山・山寺を巡って、万葉集や源氏物語、奥の細道等に触れる旅行も組込まれたが、昭和四十八年度に文部省が中学・高等学校の課外活動の一つに〝華道部〟を正科に編入した事もあって次第に本講座の役目も薄れ始め、受講者も減少して行き、茲に五十三年の歴史に幕を閉じたのである。

註

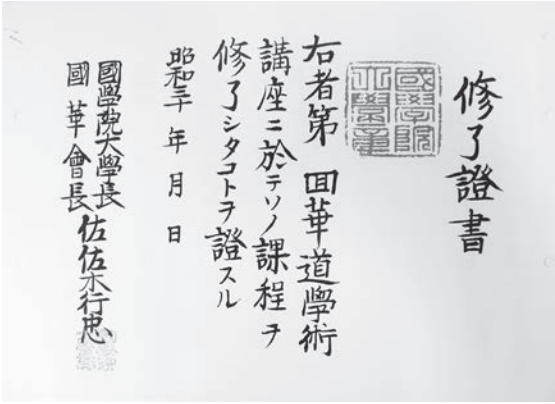
（1）「華道懇親会」の模様に就いては「華道講座綴」に綴じられた、当時の事務担当者の僅かなメモ書きを参考に推察した。当時、大学は「建学の精神」を新時代に向って如何に発揮していくかを模索中であり、短期大学設立構想もその一つであった事が考えられた。事実、当時、旧制度の専門部が昭和二十五年三月の卒業を以って閉鎖となる為、専門部に代わる物を前年夏頃から模索、短期大学部文学部の開設を昭和二十四年八月三十一日の常務委員会で決定し、十月十五日付で「短期大学設置認可申請書」を文部省に提出した。然し、翌二十五年三月二十三日に至って大学院の設置に全力集注する事に変更となり、短期大学部の申請は取り下げられた。因みに短期大学部は、申請書に依れば、高等学校卒業生を対象に宗教学・文学等に関する高等の職業的専門教育を施し、文化の普及に貢献する良き社会人を育成する事を目的に、新宿区下落合四丁目の校地（現目白学園）に設置し、宗教学科と文学科（日本文学専攻、社会科専攻）の二学科（宗教学科五〇名、文学科一〇〇名）とするものであった（『國學院大學百年史』下巻、一一二六・一一二七頁参照）。この他に大学は昭和二十六年四月を目処に「別科華道科」の開講を目指していたが、これも実現に至っていない。

（2）『國學院大學百年史』下巻、一〇四九・一〇五〇頁引用。

（3）筆者は平成十三年に本講座が終了するに際し、その前年頃、法人役員から新講座へ向けてのたたき台となる資料の作成の依頼を受けて、保管資料の整理・点検を行い、洩れている部分に就いては筆者が蒐集した資料その他から補足して提出したが、なお洩れている部分が少なくなかった。講座の事務及び書類綴は現在、庶務課から教務課、校友課、エクステンションセンターへと引き継がれていて、今回、改めて綴の一部を借り出して点検を行った。

（4）深沢運動場に就いては国立公文書館に収蔵の史料を基に拙稿「新資料に見る國學院大學の歴史」三、深沢運動場関係資料、に詳述。「國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要」第三号（平成二十三年三月発行）二〇三頁～二二〇頁。

（5）石川岩吉理事長・学長の全国行脚に就いては拙編著『國學院大學院友会百二十年史』二六四頁～二七九頁に詳述。

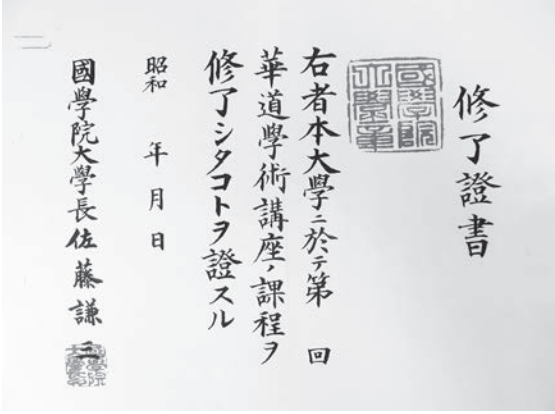


修了證書

右者第　回華道學術講座ニ於テソノ課程ヲ修了シタコトヲ證スル

昭和　年　月　日

國學院大學長
國華會長　佐佐木行忠



修了證書

右者本大學ニ於テ第　回華道學術講座ノ課程ヲ修了シタコトヲ證スル

昭和　年　月　日

國學院大學長　佐藤謙三

上から、松尾三郎主事、木村真太郎助教授が揮毫した修了証書。機関誌『華道学術講座』、筆者も一部、編輯に関わった。